寛文十一年正月十八日（1671 年 2 月 27 日）紀伊水道南方沖地震による小津波

The Kanbun South Kiisuido earthquake of February 27th, 1671, and its accompanied tsunami

都司 嘉宣 [1]
Yoshinobu Tsuji[1]

[1] 東大地震研
[1] ERI, Univ. Tokyo

寛文十一年正月十八日 (1671 年 2 月 27 日) の朝６ッ時（卯刻、午前６時頃)、四国・中国・近畿地方にかなり強い有感地震があった。ただし、地震の揺れによる被害を生じたところは無かった。この地震による小津波が、高知県東洋町甲浦と和歌山で記録されており、我が国の津波カタログに加えるべき事例である。

この地震の有り様を記録する史料は、武者（1941）の「増訂・大日本地震史料・一」、筆者（1981）の「高知県地震津波史料」、地震研究所（1982,1989、1993）の「新収・日本地震史料」の第二巻、補遺編、続補遺編、および宇佐美（2000,2008）の「日本の歴史地震史料・拾遺」の第２巻、および第４巻から合計 13 個の文献を拾い出すことができ、これらの記録から 18 地点の震度を推定することができた。

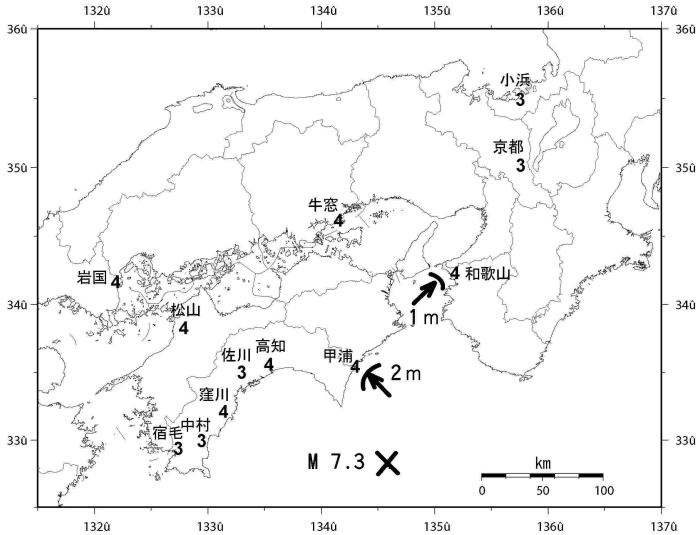
土佐藩の重臣を代々勤めた五藤家の文書に、江戸の幕府への報告文として次の記載がある。「正月十八日之地震、高知は近年不覚強地震ニ御座候。甲浦も湊之内潮之差引強。東西之町へ潮上り申程之義ニ御座候由注進有之。窪川は棚などニ在之物之内少々落申候。中村・佐川・宿毛は左程之義ニ而も無御座候」。これによると、高知城下では近年覚えぬ強震であり、窪川でも棚の物が落ちたほどであった（震度４）。中村・佐川・宿毛はたいしたことがなかった（震度３とする)。高知県の最東端で阿波国境の湊町である甲浦（かんのうら）では津波か観測され、海水が東西の市街地に上がった、という。実際に甲浦の詳細地図を調べてみると、小半島をまん中に挟んで湊は東西２つに分かれており、おのおの別個に市街地がある。どちらも居住地の標高は２～３ｍであり、津波のころ満潮と重なっていることを考慮しても、海水位の正味の上昇量は２ｍ程度はあったことになる。

紀州藩の重臣であった三浦家の「留帳」に次のように記されている。「今朝六つ時地震半時ここ元ニ而ハ珍敷程之地震、川口之波夥しくなり申候」。この文によると、和歌山でも「和歌山では珍しいほど強い揺れ」であった（震度４）。また紀ノ川の川口で「波夥しくなり」と書かれ、これも津波の記事と考えられる。ここでは水位上昇を１ｍ程度あり、紀ノ川のなかに段波（bore）が侵入したのであろう。

高知県立図書館・山内文庫の「寛文十一年日記」に次の記載がある「予州も同時刻強地震候得共、差したる儀ニ而はこれ無き由、不伯様より伝え下さる也」と書かれている。「予州」は伊予国（愛媛県）であるが、松山をさすのであろう。

山口県岩国藩の「急変之部」の中に、「（強い地震であったために）御奉行衆、目付衆、物頭衆が罷り出た（藩主に許に参集した)」とある（震度４)。

このほか岡山県牛窓町の「平島家日記」に「大地震」と記されている。

京都、および福井県の小浜で有感であった。

以上の震度分布、および津波の記録された場所を図に示しておく。震央位置は（北緯 32.8 度、東経 134.6 度）と推定する。震度４の範囲の半径を 180 ｋｍとして、M=7.3 と推定される。津波規模は、甲浦市街地で２ｍに達したのでｍ＝１とする。地震規模は津波規模に相応した値である。